



奈良町にぎわい通信

Vol.3

二〇一五・七月号

発行
奈良町
にぎわいの家





ムジークフェストなら「町家で唱歌」超！満員御礼



橋本宗玲社中による体験茶会
和やかに。



かまど体験毎週金曜、にぎわい中！



6月のイベント・来館のにぎわいから



二万人目のお客様は、
フランスから！(7/5)



町家講座は「庭」
興味津々。



町家で撮影会、かたつむりも登場。



保育園の子どもたち
不思議をいっぱい
見つけています。



大人顔負け！の
力作が。



梅仕事わいわいにぎわい

庭を楽しむ ― 造園家 大岸緑弥さんの講座から

レポート 堀内紀子(奈良町にぎわいの家)

にぎわいの家の朝は、庭の水やりから始まります。晴れが続いた五月には庭の端にある水道から何往復もバケツリレーをしたものです。梅雨に入り、ようやく一段落したのも束の間、この号が出る頃にはまたカンカン照り…。それゆえ、今は雨後あちこちに生え出すキノコの小さい傘さえ愛おしく感じます。

さて、今日は造園家の大岸先生のお話を紹介したいと思います。(※1)

作庭には施主と庭師の想いが込められるが、とりわけ、にぎわいの家にはそれが見てとれるところがあるそうです。例えば、道路から仏間がある所までが接客を目的とした庭。仏間裏の石臼を起点に雰囲気ガラツと変えて、離れまでが住居部分の庭。前者は茶庭として、華やかな花木は植えず、また石造物も配置せず、あえて控え目に構成。後者には、礎石や石臼、大ぶりの縁先手水鉢など目立つ石造物を配置しています。こういった部分に美術商であった施主、大隈さんの意向がうかがえるそうです。確かに、誰もが目に留める樹齢百年のクロガネモチの木(※2)や、縁の下の礎石を模した庭伽藍石(※3)に、施主の遊び心を感じます。

ところで、これだけ大きな邸宅なのに石灯籠がない。なぜか？大岸先生曰く、その代わり、庭への出入口や飛び石脇に、上部が平らな石が点在している。ここに春日大社の釣灯籠のような灯りを置いたのではないか。古美術商ならではの品物を持っているはず、とのこと。

私たちも当時を偲んで、燈花会の灯りを置いてみたいものです。皆さんもそれらの石を見つけてみませんか。

※1 第二回町家講座、六月二十日(土)開催

※2 縁起の良いカネモチとしてよく植えられていた時期があった。

※3 明治後期頃に流行した石造物の一ジャンルで、しかも当時の先端技術であるセメント製を使用。

奈良町にぎわいの家では、二十四節気オリジナルスタンプと節気ごとの歌で皆様をお迎えします。

短歌…喜多隆子(歌人・ヤママユ編集委員)／書…遙香(奈良教育大学)

ほととぎす一声鳴けり

明けやすき夏至の大気を切り裂き鳴けり

ほととぎすは、古くから夏の鳥として、日本人に親しまれてきた渡り鳥です。けたたましい泣き声で、昼だけでなく、夜も鳴きます。ホトトギスの声が、夜の短く、すぐに明るくなる夏至のころ、明け方の朝の空気を、まるで切り裂くように鳴いている。夏の空間の大きさと、ホトトギスの声に、夏至という季節のダイナミクスを感じる、鋭く大きなお歌です。

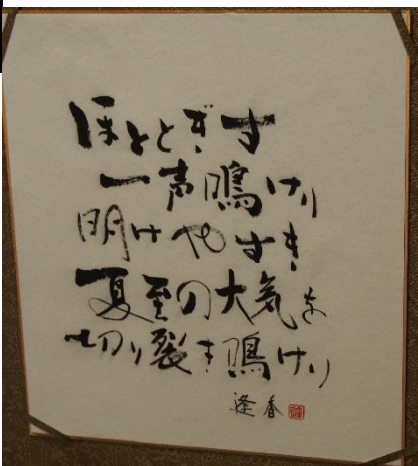
奈良町にぎわいの家
二十四節気
オリジナルマーク「夏至」
デザイン・金田あおい
こちらは「カワセミ」からデザイン



歌人、喜多隆子先生のお宅の大きな長持の中に眠っていた「蚊帳」をお借りしてきました。

(NHK「ならナビ」(6/16放送)で紹介)赤、白、青の美しい色。五十年前、お嫁入りの折持って来られた品とのこと。

「蚊帳」の中に一緒にいると、不思議な一体感が生まれ、家族のように話もはずみます。土、日の夕方に吊りますので、皆さん、どうぞ、蚊帳体験にお越しくださいね。



事務局だより

2015
7月号

「夏」から考える暮らし

事務局長

藤野正文

早くも夏至もすぎ、日がだんだん短くなること、暑い夏を迎えつつあることを感じますね。

冷房のない（事務室にはありますが）奈良町にぎわいの家では、この夏をいかに使いこなしていくのか、来訪者にどのようなおもてなし・しつらえが出来るのか？少し頭を悩まします。

日本の家屋は自然に全く開かれた構造で、外と内部が一体的につながっていて自然の気候の変化を直接受けることとなります。暑い日はやはり暑いですね。（通り庭の土間は、結構、夏でも風が通るので涼しいです。）

しかし、一方では、「家の中で自然の移り変わりを感知することができる」ともいえます。自然の変化をあるがままに受け入れ、むしろそれを楽しみとする「くらし」が今もあるかと思えます。地球にやさしい省エネ生活をいかに送るかといったやせ我慢の発想ではなく、暑さを逆手にとった楽しみ方をしたいものです。衣食住でそれぞれ昔から工夫を凝らして日本の暑い夏を乗り切ってきた、楽しんできたのでしょうか。

冷房のある季節感のない、時間的余裕のない現代生活では、これらの工夫、特に住まい・暮らしの工夫を気にとめることもなくなりつつあるのではないのでしょうか。

にぎわいの家では、風鈴、カブトムシ、朝顔、キュウリの栽培、蚊帳、よしず、打ち水・・・などスタッフが自ら季節を

楽しむ細やかな工夫をととのえつつあります。

これといった特別のものがあるわけではありませんが、奈良町にぎわいの家を、来訪者のみなさんが五感で自然を感じていただく場にしていきたいものです。



稲も玄関で
成長中！



スタッフの西村さんが
作ったキュウリ。
かまど体験で
お漬物になりました。

ムジークフェストなら参加企画
『町家で唱歌』コンサートレポート♪

広報・プロデュースアシスト

羽原あき子

プログラム

夏は来ぬ・ゆりかごの歌・雨

待ちぼうけ・シャボン玉

雨降りお月さん・かなりや

村の鍛冶屋・奈良めぐり・椰子の実

浜辺の歌・海・靴が鳴る・たなばたさま

六月二十八日午前のリハール。プロジェクトに大正時代のファッションが映し出され、美しい歌声を奏ではじめると：あら？お客様がたくさん座り込んで聞き入っているではありませんか。

「本番には人の波が来る：」と思った通り、敷地二〇〇坪の町家をもつてもお迎えできないほどのお客様が超越しにられました。コンサートの際は、歌の前にその時代背景を紹介するというもの。解説で印象に残ったのは、にぎわいの家が生まれた大正六年の翌年に発表された「かなりや」です。（作詞・西条八十）歌を忘れたカナリヤについて「：例えばこのカナリヤも（中略）もつといい歌を美しい声でこれから歌い出そうとして、いま苦しんでいるのかも知れません。だから、気を永くして待ってやりましょう。」という、作詞者の言葉が紹介されました。皆さんも納得された様子で、百年前の日本の言葉の良さも味わいながら、歌と演奏を聴かれています。

アンコール曲、満員で離れの方で聴いてくださったお客様に、歌い手の、嶋田純子さんが後ろを向いて歌って下さり、有り難いことでした。出演者の皆さんは、奈良で活躍する方たち。にぎわいの家がこうした、奈良で創造活動をされる方と共に、にぎわいが作れたらいいなと思うイベントでした。

さて、プロジェクトを操作する私の横で、八十代のおじいさまが、小さくリズムをとりながら、ずっと口ずさんでおられました。あら？よくにぎわいの家に足を運んでくださる方ではありませんか。最近、にぎわいリピーターならぬにぎわいファンの方が増えていると接客しながら感じています。本当に嬉しい限りです。思わず、おかえりなさい！といってしまいたくなる私がいいます。

それにしても「町家」に「唱歌」は合いますね！またどうぞ、次の機会をお楽しみに。

奈良町にぎわい通信vol.3

制作...奈良町にぎわいの家管理共同体

発行人...二十軒起夫

編集・構成...おの・こまち

表紙写真・レイアウト...福田昭一

撮影...奈良町にぎわいの家スタッフ

9:00~17:00 水曜日・休館

〒630-8333 奈良市中新屋町5 TEL 0742-20-1917

nigiwainoie@gmail.com

http://naramachi-nigiwainoie.jp/

イベント、講座情報は、ホームページ、フェイスブックからご覧になれます。是非、ご参加ください。



皆さん、たくさん短冊に願いを書いて下さいました。短冊のにぎわいに、スタッフ手作りの七夕飾りも喜んでいるよう。七夕は五節句の一つ。旧暦では八月の行事。八月の天の川もお見逃しなく。

